

J2.978:2

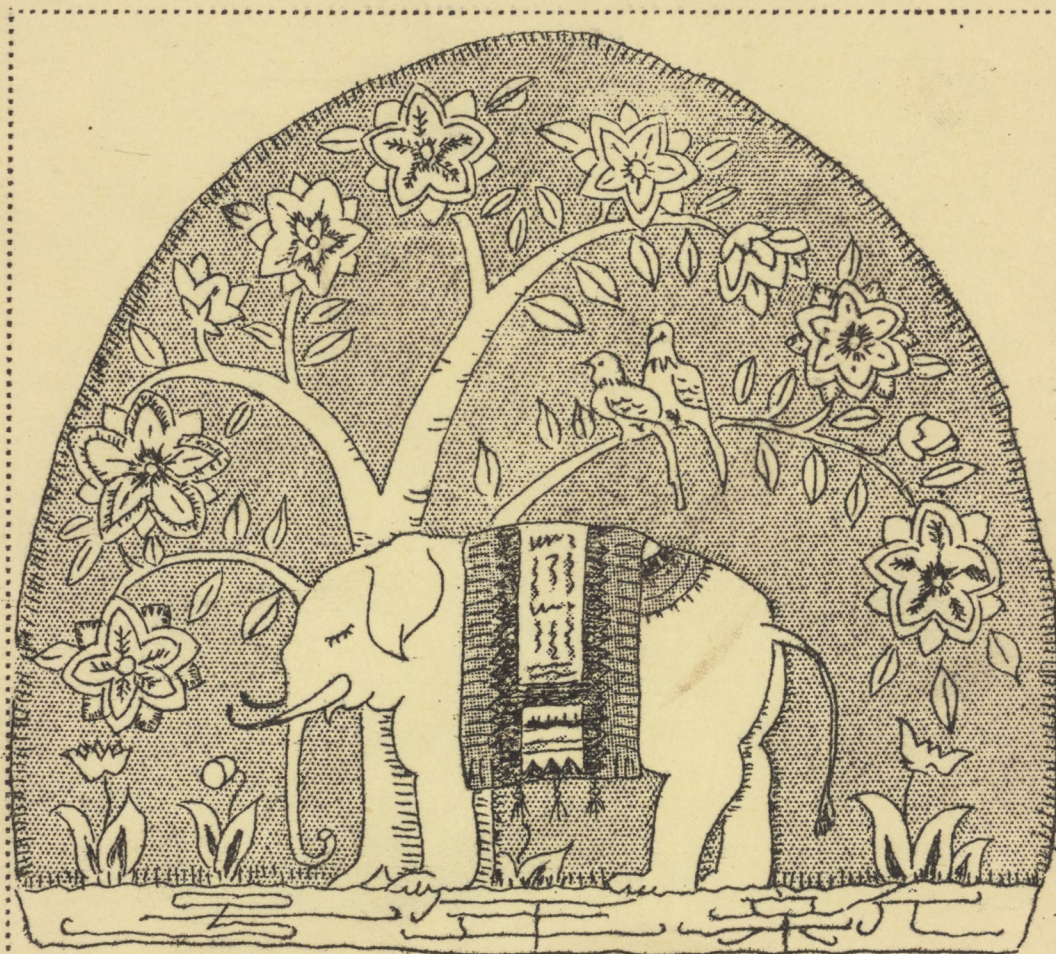
292

\* HORIN, Temple Bulletin, 1945

67/14

C





法輪



# 恭頌新春

一九四五年元旦

ポストン 佛教寺院

日蓮宗

石原 慈禎

真言宗

曾我部 了勝

真宗

長藤 行精

真宗

升岡 隆英

日蓮宗

倉橋 智教

(イロハ順)





聖

身は苦の器なり。  
心は悩の端たり。

法句經

佛法の海に入らん  
には、信を根本と  
爲す。

心地觀經

若し人ありて、恩  
を知らば、此の人  
は敬ふべし。

增一阿含經

小罪を輕んじて以て殃サヤな  
しと爲すこと莫れ、水滴  
は微なりと虽も漸く大器  
に盈つ。

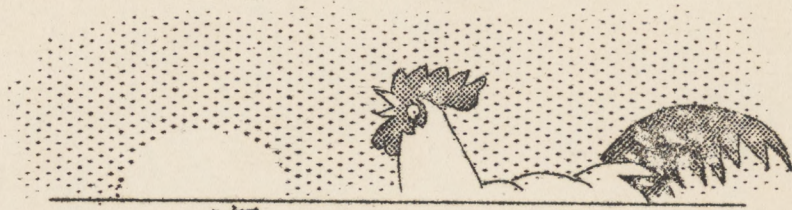
溫繫經

足ることを知らざる者は  
富むと、いへども即ち貪  
し足ることを知る人は、  
貪しといへども、即ち富  
む。

遺教經

訓





次				目			
○ 和歌	○ 童話	○ 創作	○ 隨筆	○ 聖語	○ 法話	○ 法話	○ 法話
歌	話	作	筆	語	話	話	話
・	・	・	・	と	心	客	修
・	・	・	・	金	を	に	攝
・	・	・	・	言	平	來	其
・	・	・	・		に	て	心
・	・	・	・		倉	升	石
・	・	・	・		橋	岡	原
・	・	・	・		智	隆	慈
・	・	・	・		教	英	禪
・	・	・	・			勝	禪
・	・	・	・				精
・	・	・	・				1
20	26	22	19	16	13	10	7



現時局を越ゆる新年　長藤行精

(一)

今次大戰の世局は地軸を震駭しつゝ進轉し、滔々と  
してその靜止を知らず。私共日系同胞が當ポストン其  
他に収容されて既に二年有半の星月は流れた。此處に  
居るもの衣食住は保証され、食堂の鐘に朝晝夕の三時  
手足を運べば腹は出來てこの心配はない。

一面から言ふと實に安住のやうかも知れぬが心の奥  
底からの聶きは外界にゐた時のものと大いに異り、自  
由と希望と職を失つた心的苦惱は萬人皆同一の深き歎  
きを持たぬものはないであらう。人間として自由(法理  
に即した)と希望なき世界は闇黒である。前途の光明を



聖

若し第一清淨の食<sup>ジキ</sup>を食すとも、彼の食身に入るときは則ち糞尿となる。

正法念經

信は道の元、功德の母なり。

華嚴經

佛は法を以て師と爲し佛は法より生ず。

報恩經

佛心とは大慈悲是なり。無縁の慈を以て諸の衆生を攝<sup>モツ</sup>す。

觀無量壽經

避くべきを、さくべしと知り、さくべからざるを、さくべからずと知る。正しき見<sup>ミ</sup>をいだく衆生<sup>ヒト</sup>、さいはひの途<sup>ミチ</sup>に往くなり。

法句經

訓



克く堪え、大いなる努力を以て其境期を突破しなければならぬ。この嵐の嚴冬季にあつて靜思泰然と雄躍の春を待つ思慮と強き力を失つてはならぬ。

(三)

心は我々の眼に、姿も形も見えぬが、心を以て心を視るとき善い心には光りがある。優れた心ほど其の光は強い。當所第三回の新年に際し、此の最も善き、そして強き心の光りを以て私ども自勵し、ひたすら同胞の健全と多幸を憶念して現時局を共に越えんのみ。

論語

智者ハ水ヲ樂ミ、仁者ハ山ヲ樂ム、智者ハ動キ、  
仁者ハ靜ナリ。智者ハ樂ミ、仁者ハ壽シ。  
イデヤガ



失つた私どもは半死の人生である。この半死の人生々活の中に吾々は幸ひ一命を保持してゐることは、四季に例ふれば冬枯れの人生と見る事が出来る。この時此の一命を堅く守り、内部に尊く生かし行くところに私どもの使命がある。

(二)

常盤の松も北國酷寒の地にあつては落葉するとも暖季めぐり來れば萌芽を装ふ。大正七年の新春御題「海邊の松」に

「潮風のからきにたへて 枝ぶりの

みなたくましき

磯の松原」。

御製は現境にある我等人生に於て味はひ深きものを感じんず。堅實なる發展、成功の前には辛き潮風の苦難に



として勤ぜず、如何なる難に  
阻ふも使命を忘れず、常に笑  
つて之に処し、而も人の爲に  
涙ひまなき方でありました。

### 『文化八年、朝鮮の使節が渡

來した時、幕府の旧例により  
對島を會見の場所と定め、そ  
の應聘使として大學頭林速裔  
を派遣した。その際松崎懺堂  
は大學頭の書記役として隨行  
した。ところが一行を乗せた  
船が長崎を發して對島に向つ  
ての航海中、俄に暗雲空を蔽  
ふと見るまに暴風が襲來した。  
船は激浪に揉まれて木の葉の

如く、乗組員一同は顔色を失  
ひ生きた心地もなくなつてゐ  
る最中、松崎懺堂ひとり目頃  
に増して意氣昂然と大學頭に  
向つて激越な調子で、

先生！壯快ではありませんん  
かこの雄風に乘じてわが船  
が若し江南浙江の地にでも  
到着すれば、先生と共に大  
いに大和魂を發揮して辯論  
奴を驚かしてやりませう！  
と大言壯語しました。

するとそれまで黙々として  
ゐた速裔は懺堂の壯語を聞て  
微笑ひながら、



# 修攝其心

石原慈禎



笑三の新春を迎へ自他共に慶幸に存じます。

吾等は試練の中に一陽來復と共に靜に黙考して新年に処することが肝要と考へます。

人生に山あり川あり苦惱多きことは娑婆の名の如くであります。が、人生に於て最も大切なことは、如何なる場合でも自己の使命をハッキリと認識して、眞實に生きる道を見失はぬこととであります。

それには聰明な智慧と謙讓な品格と強固なる信念とがなくてはなりません。

どんな困難があり、障害があつても咲くべき時には何の怖れもなく勇敢に咲く白梅の花！ 何といふ肅然たらしむるものでありませうか。

私は思ひます。日蓮上人は誠にこの酷寒雪中に嚴然と咲ける白梅の如きであつたとあのだ難疊重の中に泰然自若





## 永遠に生き行く道

曾我部了勝

世界大動乱の中に一九四五  
年の新春を迎へまして皆様方  
と共に新生の氣に満ちたいと  
願ふ次第で御座ぬます。

新生！ 生き行く力！

これこそ人生に於きましての  
大問題で御座居ますことは、  
申すまでも御座居ませんが吾  
が佛教は、この道を極めて行  
く事が目的であります。

人の生きんとする心程、世  
にも恐しい力は御座居ますま

7

い。人は死ぬが死ぬまで尚ほ  
生きんと願ふもので御座居ま  
して、彼の溺るゝ者は藁をも  
掴むと云ふ言葉を見ましても  
人の生きたいと云ふ心が如何  
に強いかを知り得ると存じま  
す、しかし死は凡ての生きと  
し生けるものゝ上に來ます必  
然の結果で、淵明の句にも、  
「一去三十年」といふのがあ  
りますか、一去三十年、四十  
年、五十年、人生凡て夢幻の



ほ、う、貴殿はなか／＼、元氣でござるな。しかし満

船の人々が顔色を失つてゐ

るのは、船に酔うて弱<sup>ジヤク</sup>に變

じたもの、それに比して貴

殿の昂奮は聊か強に變じて

をられる。貴殿もやはり幾

らか船に酔はれたと見えま

すな。といはれた。

さういふ速奇は強にも弱に

も變せず、平然と同じやうに

靜かに坐してゐた。その自若

たる態度を見て、懺悔は深く

感ずると共に、己の輕率さを

大いに慙じた

といふ物語を一書で拜見致しました。

人生をこの激浪に揉まれて

ゐる船にたとへることが出來

るとしたならば、吾等に對し

て又大いなる教訓を與へられ

るやうに感じます。内に力の

充實しないカラ元氣ではな

ませぬ。彼<sup>テ</sup>は誇らず其の勇

者たらんには「心を修める」

ことが肝要だと痛感します。

佛陀は、「閑かなる處に在り

て、其の心を修攝し、安住

して動ぜざること須彌山の

如くせよ」と教へられました。



は撃てん、ぬらひが全て外  
れてをるではないか」  
と云つたので、伴の武士は大  
いに愕いて一發も放つことを  
得ずして逃げ去つたといふこ  
とであります、誠に生死を超  
越して居ませねば申される言  
葉ではないと存じます。

朝咲いたかと思へば夕方に  
は萎れてしまふのが朝顔の命  
でありまするが一日といふ上  
から眺めますと短く、はかな  
い命でありますか、その咲き  
初めは何時頃からかと云ひま  
すれば七月頃から咲いて秋の

末に至るまで咲いて居ります  
同じ朝顔でありましても部分  
的に見ますと一朝々々の命で  
あつて之を、全体から見ます  
と随分、永いこと咲いたり萎  
れたりしてゐます。

尚ほその朝顔の種子が無限  
の過去より無限の未來へ續く  
ものであると考へますれば、  
その咲く精神は實に永久であ  
ると申されます。この精神を  
活躍することが信仰で、これ  
が永久に生き行く道でもある  
と信じて居ります。



如く逝き去り、凡てのものは皆悉く滅びゆくので御座居ます。

あはれ凡夫の浅間しさより其の生を見て死を見ませぬのは、人生の根本を忘れたもので御座居ます。しかし死を考へますのは、死滅を考へるのではないので、新生を考へ永生を考へるのでなくてはなりません、吾々は生きねばなりません。永遠に、此の免れない死を超越してその永生を續けねばならぬと存じます。

幕末の偉人に勝海舟と云ふ

人がありましたが、海舟は佛教の修行もよくした人で牛島の廣徳寺で餘念なく佛典をいもとかれた様で御座居ます。

かつて京都での或る日勤王黨と呼ばるゝ中に、非常に海舟をにくむ者があつて、彼を殺さんとして四條通りを過ぎる折から物陰から待ちまうけた一人の覆面の武士が現れ、銃を構えて正に海舟を射たうとしました、これを見た海舟は驚く色もなく静かに、武士の方に歩み寄り言ふには、

「それではとても己れの体



ていたゞきます時に、夢じや  
とてダラシなく暮らすのでな  
く、夢幻の様な短い人生なれば  
こそカ一杯精一杯、努力せず  
にはゐられぬ目覺た者の心構  
へがある筈であります。

水戸光圀卿が人生々活の心  
構として「娑婆の掟」といふ  
のがあります、その中に七  
ヶ條をあげ人生を客分として  
心を引きしめて暮せと書いて  
あります。

一此の世には客に來たものな  
れば義理あるべし。

一夏の暑さも冬の寒さも客な

れば嗜み堪ゆることが肝要  
なり。

と言ひ最後に、

一跡に心を残さず御暇申すべ  
し。父母に呼ばれてかりに  
客にきて心残さずかへるふ  
るさと

と結んであります、水戸公の  
信仰は今問題ではありません  
が客として人生を見返します  
とき、義理人情は申すまでも  
なく暑さ寒さに至るまで不平  
をこぼす前に客としての心の  
嗜みが肝要であります。特に  
最後の心残さず御暇申すべし



# 客に來て

升岡隆英



佛光を浴びて千九百四十五年の新年をお迎へ致しましたことを先づ年の始めにお祝ひ申し上げます。

考へて見ますと全く過ぎ去つた一ケ年はまことに短くお正月の次の日に又お正月を迎える様な氣持ちが致します。

彼の豊太郎も辞世の歌に、露とおきつ少と消えぬる我が身哉、なにはのこと、は、夢の世の中。

と詠つてゐますが一ケ年じゃない、私共の一生、即ち人生の榮枯盛衰そのものが全く一炊の夢なのであります。お釋迦如來さまも「如夢幻泡影如露亦如電」と地上のすべてのものを示し下さつてあります。

然しこの夢の世の中に唯一つ私共が夢を夢と知らせて頂く佛さまのお力を己が心として、この人生を再び省みさせ



## 心を平に

倉橋智教



戦時中とはいへ恙な皆様と共に新年を迎へますことを誠に喜ばしく存じます。

元旦や冥土の旅の一里塚  
芽出度もあり芽出度もなし  
一休禪師の歌の如く刻一刻死  
に近づいて居る吾々でありま  
せうが、出来得るだけ永く生  
きたいのは誰しも願ふところ  
であります。

長壽するには勿論健康が大  
切でありますが又「心を平に

して暮じ、心配したり怒った  
りすることなく、正しい心で  
愉快に暮す事が大切である」  
と昔から申されて居ます。  
しかし私共の心はその名の如  
くコロ／＼と常に動いて居る  
ものであります。

佛様は「一猿六窓」の譬を  
説いて私共の心は猿エノコの様な  
ものであり、丁度一匹の猿が  
六ツの窓をあちうこちう飛び  
まはつてゐる様に私共の六根



と云ふ段に至りましては洵に  
信仰なくしては云はれぬ妙境  
であります。

平素、大覺一番、後生の犬  
問題に夜の明けた人にして始  
めて心残さず人生をお暇申す  
ことが出来るのであります。  
どうも皆様、本年の始め元朝  
の今を期してお客分としての  
氣持を以て

父母によばれて、かりに

客に来て、心残さず、

参る御浄土、

の一里塚、一九四五年といふ  
道標にお浄土参りの道中人ら

しく、心あせらず、体ゆたか  
にお念佛の中にどつしりと腹  
を据えさせていたゞいて、こ  
の一ヶ年を過ごさして頂きた  
いと思ひます。

常恒に老ひざる者、それは  
常に希望と喜びと感謝に生き  
る信仰の生活者であります。

み佛の恵の中に

新玉の、春を迎えし

今日ぞ、うれしき。

元朝の光こそは、やがてお浄  
土の光りであることを、想起  
して年頭の辞といたします。



りでなければならぬと同様に、姿もうはばかり飾ったところで何にもなりません。

心の修養が出来て始めて姿も調って来るのであります。

うつむいた心や高し百合の花  
上むけば限りなしとや百合の花

雑草の中でうつむきかげんに咲く百合の花、たゞ風にゆらゆらゆれる様は實に愛らしく奥床しいものであります。

又人間には希望がなければなりません、希望の無い者は老人に等しく世間より取残されて行くものであります。し

かし乍らそれが度を越し貪慾になつたり、世間を正しくする事が出来なくなつてはなりません、碁を打つ時無為恬淡あせらず、黙々と先手を見る時は勝を得、勝たんと急<sup>イサ</sup>てゐる時は必ず負けるものであります。人生も百合の如く、又碁道の如く、あせらず黙々と無慾の慾に生き、先手(チャンス)を取りにがさない様にすべきであります。それこそ心は平<sup>タラ</sup>にして常に全てを正しく見る事が出来、又長壽の法であります。

完



即ち、眼、耳、鼻、舌、身、意、によつて私共の心は常に動かされやすいのである」と説かれてあります。而もその心は煩惱にとらはれ、又あざむかれて迷ひから迷ひと動いて居るのが私等凡夫の姿であります。涅槃經に「心の師となるも心を師とせざれ」とあります様に煩惱のまゝに動かされる事を慎まねばなりません。

聖歌に「自らよこしまにふる雨はあうじ風こそ夜半の窓をうつらめ」とありますが、

雨水と同じ様に私共の心性といふものは正しく善で眞直マスダなものであります。煩惱ヨシニマの風に吹き流されて邪になるものであります。又眼は心の窓、聲は心のひびき、そして人の姿は心の影と申されてゐます。修行のつんだ達人の眼には隙がなく何所となく侵すべからざるものにふれるものであります。喜怒愛樂、皆眼や舌葉に表はれ、その人の氣持や心の徳（人格）にもふれる事が出来るのであります。

眞の雄辯は人格のほどばし



聖

語

哀<sup>アハレ</sup>を知りて、良<sup>マコト</sup>に師教の恩厚を仰ぐ。  
慶喜彌々<sup>イヨイヨ</sup>至り、至孝彌々重し。

親鸞聖人

相構へて相構へて心の師となるとも、  
心を師とすべからず。

日蓮聖人

生を明め死を諦らむるは佛家一大事の  
因縁なり。生死の中に佛あれば、生死  
なし。

道元禪師



聖

佛法は行を貴むて不行を貴ばず。但だ能く勤行せば復寡聞なるも亦先ちて道に入る。

龍樹菩薩

語

夫れ佛法は遙かに非ず、心中にして即ち近し。身を棄て、何んか求めん迷悟我れに在れば發心すれば即ち到る。明暗他にあらざれば信修すれば忽ち証す。

弘法大師

慶<sup>ホウキ</sup>しき哉や、心を弘誓の佛地に樹<sup>タテ</sup>て、念を難思の法海に流す。深く如來の矜<sup>コウ</sup>。



隨筆 湯の音

曾我部了勝



今にも雪になりそうな、ジーンと底冷へのする室の中で、聞えて来るのは火鉢に掛けた、湯沸の音だけが妙に淋しく耳を打つ、始めて両親の膝下を離れて孤独な淋しい、高野の山の生活に入った私には忍びがたい淋しさで、書物を見る元氣も、筆をもつ氣にもなれなかつた。

こうした時私は、いつも掃除や参詣客の何百人前もの食器を洗ひ終つて、夜の佛前での長い讀經をすませてから、自分にあたへられた、疊表がすり減つてしまつて白くなつてゐる室の中で、煎餅蒲團と故郷のやわらかい、ふんわりとした蒲團を思ひ比べて、泣き出したい様な郷愁にひたりながら、赤く竈焼して所々に血がにじみ出てゐる手を火鉢にかざしながら、湯沸の音に、ジーンと耳を傾けた。



## 金

一言の恩徳は  
萬玉に勝る。  
一言の教訓は  
重さ千斤。

夢想國師

## 言

終りを慎むこ  
と、始の如く  
なれば、則ち  
敗事なし。

老子

眞面目なる努力は  
たゞ知らず識らず  
の間に成就するも  
のなり。

ゲーテ

善は一念より發し  
愈々相續して人格  
を大成し帛キタは一縷ル  
より成り縷々ル相繫アヒツキ  
がつて錦繡を完備す。

加藤咄堂



の湯の音がすゝり泣きの聲から雨の音に、川瀬に、渦巻く急流に変わって行った、私を見いだし得ない。希望の夢が消へたのであらうか、刺激が無いのであらうか、環境がしからしめるのであらうか。

炭焼きの山男の様に、真黒な顔や手をした人が、背中に炭を二俵も、せおつて、海老の様に腰をまげて今日も亦私の家の前を通って行く、炭の出来をたづねると、得意そうな顔をして喜びに満ちて炭の出来を自慢して、私にもその中に二三俵くれる約束をして下さる。

私は炭焼きの人々の前身を考へながら、氣毒だとか、不体裁だとかとは、およそ反對の明朗な氣分を感じるのである。希望でない、刺激でない、環境の中に明るく朗らかに生きて行く人を、私は楽しいものとして見るのである。



始めは、聞きとれない様なすゝり泣きの様な音が、次第に高まつて、雨の音の様に、更に川瀬のせゝうぎに、渦巻く奔流の響きに、やがて、ピタリと音が止ると湖の様な静寂な沈黙が漸時續く、沈黙が破られた時、恐ろしい勢ひで大海原の怒濤に變つて行き、沈んで行く私の心の底に何かしら力強いものを植へつけてくれた。私は火箸で灰を綺麗になうしては字を書き又書いては消してゐた頃のことか、暗い頭の奥にこびりついてゐて忘れられない思ひ出である。

### 火鉢に炭に湯沸り。

アメリカに渡つて來てから、火鉢も炭も見なかつたが、キャンプ生活に入つてから、思ひがけなくも火鉢も炭も見ることが出來て、忘れそうになつてゐた思ひ出が新しく滲いて來て、楽しい氣がしてならない、妻や子が寝靜づまつた夜半に炭の匂いと湯の沸く音を聞きながら、高野の山や故郷へ思ひを馳せて、やるせない思ひにひたるものゝ、どうしても湯沸



「へエー！ このポストンでそんなに、エ、亭ばかりありますかいナアー！ 二年半といふものマルデ判で押した様に起きてメスホールへ食ひに行つて、十六弗の仕事をし、シヤワーを取つてぬてしまった、それだけで何にもエ、ことはありやーヘンかなあー！」

女の話は半ば皮肉を帯びた挑戦的態度で切口上である。

男は眼を丸くして、

「エー、ミセス、あんたは勿体ないことをいふ人じやの！ その判で押した様な日暮しを、このポストンで二年半もさせてもらつたあんたの今日までのそのウラには何か目に見えぬ大きな力があるからじやらう……！」

女にはそんな心持ちは判らない。

「あとにあるか先にあるか知らんが……マアどつちにしてもなア……！」

女はこの男、何を云つてゐるんだい。わしはそんなことには



創作

# 平凡の眞理

升岡 隆英

邦子は今日も忙しくタイプライターを叩いてゐた。毎日のことながら立ち代り入り代り人の出入のはげしい此のオフィスに二年半も勤める邦子は、稍々倦怠を感じぬでもなかつた。パチ／＼／＼叩くタイプのキーの音にも増して一人のふとった五十格好の女がペチャ／＼お喋りを始めた。邦子は又かと云はんばかりに苦笑をしてみたが、タマリかねて耳の葉にかけてゐた鉛筆を右手にもつて頭の中を、どここゝとなく髪の間を掻き廻した。

「何か、エ、ことはありまへんかいなあ……」

話相手の男は急に驚いた様な風で、

「エ、事は朝から晩まであり通しよ——ミセス——」

聞いてゐた女は、



聞いてゐた女は

「燈臺の天香さんじやあるまいし、……—そこまで悟つ

たらね——」

その女には今の氣持が判らない。然し最前からきいてゐた利い邦子の耳にはこの二人の會話が生れて始めてきく尊いものゝ様に思はれて來た。

生きるものゝ悦びを始めて感じたかのやうに、そしてこの二人のどちらに自分は味方となつてゐるのだらうかと思ひ返した時、邦子は軽い微笑の中に吹ひ込まれる様にタイプのキ―を打ち始めた。平凡の會話の中に交はされる眞理を毎日見逃してゐたことが邦子はとても惜しいやうな氣がした。

をはり

くらがりて影法師めを見失ひ

火を燈してぞ見つけたりけり



あまり興味はない。樂で十六井もらへるもつとエエ仕事かほ  
しいのですと云つた様な素振りをして、自分の呼び出される  
オフィスガールの方ばかり見入つてゐる。こうなると今度は  
男の方が眞劍で、

「若しこの判で押した様な生活が一過でも變つたらどうだ  
らう、不足や不平を云ふて暮した今日の日も廣い世界に  
は病院のベッドに呻吟し、今晚もわからぬ臨終苦悶の瀬  
戸際をさすうふ人々もある。戰禍に見まわれて父子兄弟  
夫婦バラ／＼に逃げ別れ、泣くに泣かれず、食ふに食の  
ない氣毒な人々もあらうに、お互ひあんなもわしも、か  
れこれ五十幾年六十近くも一日の様に、寢て起きて食は  
せてもらつて働かさしてもらうことが出来たことは大き  
な仕合せじやないかい。わしは金のために働くのじやな  
い。生きる悦びのために働かずにおられぬのじや。毎日  
が、エエことのあり通しじや。」



て暖くなつたら一ツ立派な巢をつくつて寒くない様にネドコをつくろう」

と思ひました。その内夜が明けてあたりがだん／＼明るくなると同時に暖くなつて來ました。

その鳥は昨夜の寒かつた事も亦巢を作ることと忘れてコクリ／＼と寝てしまひました。日はだん／＼高く昇つてゐるのに、まだよくねて居ります。そのうち日が暮れて寒くなつた頃ようやく目をさまして、

「シマツタ。巢を造つておけばよかった」

と思ひました。が後のまつり、暗くてどうすることも出来ません。寒さは又ヒシ／＼と身をさすやうに嚴しく寝ることもできません。哀しい聲で泣いて居ります。

「明日こそは巢を造らう」  
と思ひました。けれども夜が明けて暖くなると又巢をつくることが忘れて、ねてしまひました。

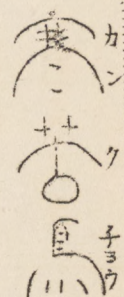
毎日こんなにウカノ／＼して過してゐる中に増々寒い冬が



童



話



倉橋 智 教

皆さんー、たのしいお正月が來ました。昔の人が「一年の計は元旦ガシにあり」と申しておりますが、少くとも今年はお佛様の子として日曜學校を休まない様にしようと、プランを立てねばなりません。そしてどんなつらい事、いやなことがあつても一旦思ひ立つたことはやり通すだけの勇氣がなければなりません。

むかしノ ポストンの様

に暑い天竺テリジといふお國がありましたが、ところが北の方ばかりも高いノ、山で暑い夏でも寒くて何時も山の頂上オウジラには雪がつもつて消えたことがありません。「あゝ寒い」と一イチの鳥がとても寒むがつて居ました。あんまり寒いのでヒトバシ一晩中タノ／＼ふるへてどうすることも出来ません。

「そうだ明日お日さまが



和

初春の鏡の餅に

向つても

濁らじと思ふ

我が心かな。

(新見正路)

元旦や福壽の

神が來た風に

果報ねて待つ

また起て待つ。

(蜀山人)

はかりなき命<sup>イチ</sup>たまひし

よろこびは

御名よぶごとに

いやあらたなり

(大谷智子)

芽が出りや摘まれ

葉が出りや取られ

それでも

茶の木に花が咲く

(詠人不知)

歌



やつて来て、この鳥の住む辺にも一面に雪が降って来ました。なほ寒い／＼日がつづいて、かはいそうに、この鳥は死んでしまひました。

28

人と云ふものは、氣持がムツカシイもので、節季や師走になると、エ、今年ももうわづかじや、來年かうこそ「オノレ」と云ふではないか、それが年に垢がついた所ぢや。さて一夜明けると氣がシヤンとして心から新になるそれで芽出度でないか。吉田松陰

笑話

●こよみ

父「曆を買つて來ようか」  
Papa  
息子「お父さん、日曜の澤山ある曆を買つて來てちやうだい」

●それは無理

妻「年は争へないものね」  
夫「なぜ？」  
妻「寫真にもシワが撮れたね」  
夫「そんなの、わけはないさ」  
引き伸したらシワ位とれるだらうよ。」



○ストーブの用意される晩秋ともなれば年末の近きを思はせ皆様の無聊を慰めんと新年特輯号の語は良かったかお鉢が廻り大役の中に全開教師の高僧方、總動員昼夜兼行でお歴々が印刷屋の小僧から丁稚旦那を努め、當所で印刷屋の仕事を修業したのが收護とは涙が溢れる。

○物資不足不自由と無能の手で出来たのが此の小誌、労苦を汲んで貰へば本誌も浮ぶ。

○當院の印刷器もエルセントロ佛教会のを拝借して二年有半、十萬枚を刷り越へ、「法輪」第五十号を突破し右佛教会に深謝す。

○小誌作製に倉橋、升岡両師装体印刷を擔當され、四十五区風間氏の御援助、製本に當つては四十六区丹原御夫妻、森氏、三十六区則武両家、秋山静子夫人、児島夫人、四十五区的神谷、木村、吉村諸夫人、第三キヤンブ野澤泰嘉氏等の多大の援助を、

謝す。

○本誌を終うんとする時突如として、一九四五年一月二日より同胞に全加州再開と一九四六年度までには同胞の全收容所を閉鎖の發表を聞けば、これが當所最後の記念物となるか知れぬと思へば愛執の情深きかな。お互ひに自重し一の信念と民族の襟度を保ち、皆様の静安多幸を念ず。○最後に何事も後の祭りで氣の附くが凡夫の智慧、本号不備の點は笑覽を乞ふ。(長藤生)

一九四四年十二月印刷  
一九四五年正月發行

編輯 長藤行精  
校正 石原慈禎  
原紙 曾我部了勝

アリゾナ州 ポストン  
發行所 佛教寺院

四十五区十四C



